

令和4年度 第1回那覇市IT戦略会議

日時：令和4年8月16日(火)

場所：那覇市役所本庁舎10階会議室

稲垣議長　　まずは、議長に選出いただきましたことにつきまして、微力ではありますが進行等の任にあたらせていただければと思いますので、皆様にもご協力を賜りますようお願い申し上げます。では、これより『那覇市IT戦略会議』の第1回会議を始めます。審議に先立ちまして、本日の会議を公開することについて皆様に報告します。本日の会議の内容には、個人情報に関するものや、公開することにより公正さが阻害される内容は含まれませんので、公開としております。公開手法についてはオンラインで配信しております。

　　本日は、はじめに事務局より、計画策定の全体像、計画策定の考え方、骨子案について説明があった後、「計画対象範囲の考え方」及び「計画策定の理念」について議論を行う予定です。委員の皆様におかれましては、これまでの経験や知見から忌憚のない意見をいただければと存じます。それでは次第に沿って進めます。次第の3について事務局から説明願います。

事務局　　事務局から以下の項目について説明（*説明内容は省略）

1. 計画策定の全体像について
2. 計画策定の考え方について
3. 骨子案について
 - (1) 骨子案
 - (2) 計画対象範囲の考え方
 - (3) 計画策定の理念

稲垣議長　　ご説明ありがとうございました。議論をこれから開始したいと思います。只今、説明があった事務局案では、現在、事務局が考えているフレームが示されていますが、通常は、目的があって、手段があって、フレームが固まってくるのが順番だと思いますが、今回は倒置法的ではありますが、フレームからスタートして、目的の再検討という順番で進めていきたいと理解しました。その上で、まず計画対象範囲の考え方について議論したいと思います。その前に一つ確認しておきたいのが、今回の計画の位置付けについてです。今回の計画は第5次那覇市総合計画の推進をDXの側面から補完するとあります。那覇市の公式ホームページから第5次那覇市総合計画の内容を確認したところ、4年前に策定されており、これまでに社会の様相もコロナもあり大きく変わってきておりますが、今回はこの計画をDXの側面から補完して推進するという位置付けとなっているようです。第5次那覇市総合計画の中で一番肝になっている

のは何かと言うと、つながりを意味する「絆」がメインのワードとなっており、「協働の絆」、「平和の絆」、「共生の絆」、「活力の絆」、「共鳴の絆」の5つの絆が最初のページに示され、そこから議論が展開されてきました。大変すばらしい夢のある総合計画だと感心して拝見しました。私の感想を申し上げますと、沖縄県のDX推進計画では「行政のDX」、「産業のDX」、「暮らしのDX」の3分野に分けて議論が展開されております。それと比べて、今回の事務局案では「産業のDX」が手薄になっており、これでいいのかどうかという議論があるかと思えます。産業に関しては国や県に任せて、那覇市においては行政と暮らしに特化していくのかどうかということが一つあると思って拝見しました。ここから先は、事務局説明の内容に対してお感じになったことを委員の皆様から順に伺っていきたいと思います。

事務局 議長よろしいでしょうか。総合計画に対して事務局から少し補足させていただきます。

稲垣議長 はい、お願いします。

事務局 只今、議長の方から第5次那覇市総合計画についてご説明がありましたが、4年前に策定されまして、ちょうど今、中間の見直しを行っているところでございます。ご紹介ありました5つの絆を含め、DXの視点、ウェルビーイングの視点、グリーンエネルギーの視点など、時代に合わせた項目を加えていく作業を進めており、事務局としては、この上位計画の見直しと整合性を図りつつ、本計画の策定を進めていきたいと考えております。

稲垣議長 ご説明ありがとうございました。要は、4年前の総合計画にこだわりすぎることはないこと、また、今、進んでいる見直し作業についてもいただける情報があれば、私どもの会議の方で共有させていただいて、整合性を図っていくということで理解しました。では、最初に副議長の島袋先生からコメントをいただきたいと思えます。

島袋副議長 島袋です。デジタルの生活に関しては、住民の皆さんは民間の様々なツールを利用していると思えます。大学の例を申し上げますと、リモート講義では、講師が使いやすいリモートツールをそれぞれの講師が利用するため、この講義ではT e a m s を使おうとか、Z o o m を使おうとか、大学のシステムを使おうとか講義を受ける側の学生が混乱している状況です。専門家に言わせると、それぞれのツールには特徴があるので、なかなか一つにまとめることは難しいという声も聞きますが、ツールの特徴と大学の場合は学生の使いやすさはどういうものなのかとういことを突合していくプロセスが必要だと思えます。特に、市民生活の場合は、那覇市30万人余りの市民の皆さんの暮らしやすさ・使いやすさとなると、すごく多様なニーズがあり、そのニーズをどのように把握し整理していくかということはこの計画の中でも必要になってく

ると思います。今後、この何回かの会議の中で、この多様なニーズをどう整理していくかテクニック的などころも含め難しいところもありますが、私たちが市民生活をイメージする際は、一旦広げてみて、萎めていくといった手法が必要だと感じています。今回の事務局案の住民ニーズ把握では、直接、住民へのヒアリング及びグループヒアリングを計画しているので、その点においては、声なき声をどう拾うかということが示されており、良い手法であると感じています。

議長 では、ご発言したい方は挙手をお願いします。それでは島田委員よろしくをお願いします。

島田委員 ご説明ならびに稲垣議長の論点整理も参考になりました。ありがとうございます。感じたことと幾つか思ったことをお伝えできればと思います。本来であれば、目的みたいなものがあつた上で作業を進めていくといったやり方が、民間企業に30年近くいた私からすると当たり前となっていますので、フレームワークがあつて、次に目的・戦略のところを攻めていくというやり方はある意味面白いと感じています。その中で、一番最初に思ったことは、「人々の生活をより良いものへと変革するDX」はとても良い表現だと感じており、イコールこれがウェルビーイングの考え方だと思います。ただ、裏を返すと、何についてより良くするのかということがぶれていく可能性がありますので、会議の中では、しっかり、優先順位をつけること、どこまで範囲をどこまで広げていくのか定義することが重要ではないかと思います。

二点目は、住民参加のアプローチについては素晴らしい取り組みだと感じています。ひとつ注意点があると感じています。民間でも一緒ですが、例えば消費者の声は特にB to Bであればお客様の声はすごく大事で、声をよく聞こうとします。ただ、「今困っているのでこうして欲しい。」といった今の声はパワフルかつ絶対的な声ですが、持ちたい視点は未来の視点で、10年後、20年後どれくらい先の声を聞くかはさておき、この視点も抱き合わせでこの計画の中に盛り込むことが重要だと思います。メーカーにいた経験を踏まえますと、消費者の声（つまり住民の声と近いと思いますが）ばかりになると対処療法となつてしまい、付加価値を付けていくことが出来にくくなると感じていました。若宮さんが自己紹介の際、デンマークとの比較の中で日本が遅れているという話をされていましたが、海外の先進的な取り組みや委員の皆様専門的な知見から見ている未来の図みたいなものを意見交換するビジョンセッションのようなことがあつてもいいのかなと思います。

三点目は、議論の一つである計画対象範囲について、行政のDXからまちのDXへという流れには賛同します。最終的には住民の福祉、生活の向上、那覇市という沖縄で一番大きな都市がどう豊かになっていくのか、一人ひとりがどうウェルビーイングを感じていくのかということは、市職員の一人ひとりがウェルビーイングであることから始まると感じていますので、そういった意味において行政のDXから始まる流れに賛同します。行政の職員も住民の皆さんもいろんな事情や状況があるけれども、那覇市では一人ひとりが本来持っている強みとか力とか

可能性を十分に発揮し、豊かな人生を送れるんだという状態にするための手段にDXがあるんだと改めて感じています。

最後に、私が今回参加させていただいている視点のひとつにウェルビーイングがあるとお伝えしましたが、沖縄にウェルビーイング推進協議会をつくった理由は、沖縄という場所が世界で五つしかないブルーゾーンに選ばれているからです。ブルーゾーンは長寿の方が多くいるエリアということですが、それはすなわち、心身ともに健康、気持ちにゆとりがある、社会的に良い状態であるからこそ、まさにウェルビーイングな状態である注目すべきエリアであると理解しています。この5つの中に沖縄が入っていることは、日本としてすごく自信を持つべきこと、自慢できることだと思いますので、沖縄のウェルビーイングが全国に広がり、日本をより良くしていくことにつながれば、沖縄の地域としてのプレゼンス向上、シビックプライドにつながっていくと思います。特に、那覇市は沖縄の中核都市であり影響力があるので、那覇市のウェルビーイングが上がっていくということは素晴らしいことだと思います。冒頭、稲垣議長から、産業のDXがなくて良いのかというご意見もございましたが、私はなくても良いと感じていて、那覇市の32万人の住民の状態が良くなれば、おのずと産業も持ち上がるし、また、県が産業のDXに取り組めば沖縄県の中核都市である那覇市はその対象となるため、今回の計画では行政と住民のDXにあえてフォーカスすることは問題ないと考えています。

稲垣議長 島田委員ありがとうございます。続いて発言したい方お願いします。はい、若宮委員お願いします。

若宮委員 若宮です。よろしく申し上げます。素晴らしい構想を拝聴しました。ただ、日本全体的な話にもなるのかもしれませんが、外国であれば、納税者の視点で、いくらお金がかかるかとか経済効果を意識するが、それらが前面に出てきていないということがいかにも日本の役所っぽいところだと感じています。例えば、窓口に行かなくてもよくなると、よくウェルビーイングの観点で語られることがあるが、私たちが市役所に行くことなんて一週間に1回もないし、人が亡くなった際にかかる手続きもワンストップでできるという自治体もありましたが、一生に1度か2度の手続きのためにお金をかけることを考えると、やはり何のためにいくらのお金をかけるのかといった観点も大事なことだと考えます。また、沖縄という土地柄である明るさ・楽しさ・ユーモア・物語性といった視点があってもよいと思います。

次に、現在、役所ではこういうことを計画して、こういうことをやろうとしていて、現在はこここの段階にあって、今後このようになっていくんだといったといった広報活動も大事だと感じています。例えば、現在、母子手帳があるけれども、第一段階では電子母子手帳になり、次は子ども手帳でもいいんじゃないかとか、次は子どもが育って、健康手帳になっていくといった情報を市民と共有していく形が必要だと感じました。

それから、日本では官民共同の事業はあまりうまくいっていない感じがしますが、例えば、エ

スロニアの元大統領に電子政府の成功の秘訣を聞いたら、銀行の頭取を口説いて金融機関と一緒に取り組んだと言っていました。その理由は、住民は役所の窓口には頻繁には行かないけれども、銀行の窓口には頻繁に行くので、デザインを金融機関と一緒にすれば、操作手順が同じで住民の利便性は高まるからだということなんです。この話をデンマークでもしたら、デンマークではシステムの更改を行う際には、その費用の半分を銀行協会に持たせ、民間と同じ手順を導入したと当然のごとく言われました。

それから、もうひとつ、現在、デジタル甲子園（Digi田）が開催され、市町村ベースでのDとXの取り組みが紹介されており、そのような中から参考にされても面白いと思います。例えば埼玉県深谷市では、特産品の「ねぎ」をもとに名付けられた地域通貨「negi(ネギー)」を発行して地域の課題解決に取り組んでいます。現在、人気投票中で一番人気がある市役所の取り組みなど参考にしたいかと思いますが。

稲垣議長 若宮委員ありがとうございます。続いて発言したい方お願いします。はい、福島委員お願いします。

福島委員 福島です。ご説明ありがとうございます。稲垣議長から総合計画の説明もあり、全体的に色々なことが見えると形となりました。ありがとうございます。私から何点かあるんですが、まず一点目として、ありがたい未来から始めていくという話が各所にあり、とても共感でき大事なことだと感じています。バックキャスト手法を取り入れていくという話も伺い共感しているところですが、難しいなと感じているのが、バックキャストでありがたい未来を語り合うと、意外に、10年後、20年後のありがたい姿については合意できるんですが、それを現実に近づけていく仕組みをとった際に、現実に近づけば近づくほど、それぞれの想いや立場、考え方が違うので、未来は同じでも向かう道が違うといったことが起こりがちです。その際に発生する衝突は大事ですが、意見の食い違いを無理にまとめていくとその過程で結構熱意が奪われてしまうため、結局みんなで合意を得ようとして、結果的にふわっとまとまるといったことが見受けられます。未来を考えるワークショップであればそれでも良いと思いますが、施策まで落とし込む推進計画であると考えれば、その部分は注意深くやる必要があるのかなと感じています。特に市民の視点でこの計画を作っていきたいという話がこの資料の中にも出ているので、「ありがたい未来」から現実まで戻していく、その施策まで落とし込んでいく際に、グループインタビューを含めどこまで市民を巻き込んでいくのか。全く巻き込まないでとりあえずやりますという話もあるかもしれませんが、可能であれば巻き込んだほうがより良いのではないかなと感じているので、その設計をしっかりと考えていきたいです。

2点目は、対象範囲として行政DXから始めることは私も賛同します。行政の効率化を進めることで、リソース（余裕）が生まれ、市民に良いサービスが提供できるアイデアが生まれるといった考えは、強く訴えていくと良いと思いました。それと並行して、市民協働にDXを入れて

いくという取り組みは、今からでも始めていくべきだと考えています。こういった取り組みは、そう簡単には市民に根付いてはいきません。私も金沢で取り組んでもう来年で10年になりますが、10年たった今でも、（やり方が悪いと言われるかもしれませんが）、いまだに「シビックテックって何？」といった方もたくさんいらっしゃいますし、そもそも市民活動にデジタルを入れることに、それは行政がやってくれるんだろうと思っている方もいらっしゃいます。全国的に見ても、まだシビックテックがない地域もありますので、そういった意味で時間をかけて作っていくものだと考えると、ぜひ並行して、市民との協働の中にDXの要素を取り入れていくことが必要だと考えます。例えば、沖縄にもシビックテックコミュニティがいくつもありますので、そういったところとどう連携をとっていくのかといったことも考えていくことも大事だと考えます。

3点目は資料の中にある民間が主体となる場所について、どう関わっていったら良いかということですが、私の考えでは、同じ方向に向いているのであれば財政面も含め積極的に支援する考えがあってもよいのではないかと考えます。それと並行して、市としては市民の活動を先に行うということであれば、その活動が活発となるような仕掛けを作っておく。那覇市として「市民の活動を応援している」という姿勢を見せることがとても大事だと考えます。例えば、私の地元の金沢市では、シビックテックのマッチングイベントを開催し、市民協働のアイデアに作り手がマッチングさせていくような取り組みを行っています。また、海外ではシビックハックナイトといったイベントに行政の職員の方も参加していて、行政と市民がオープンな場で実際にテクノロジーを使ってどんなふうに課題解決ができるか議論などを行ったりしています。そういう場を那覇市でも創っていくとよいと思います。例えばホームページひとつをとってみても、海外では仕様書を市民と一緒に作っていくようなイベントを開催しており、そのようなやり方もあるのかなと感じています。そういった取り組みをするためにも、行政が一生懸命にやっていることを市民が知らないのはもったいないので、若宮さんが言われていたように広報活動は重要であると感じます。

最後に、那覇市さんの資料にはオープンガバメントと言われる広くオープンに市民参画を作っていくという姿勢が見えて、私としてはこれからのDXはそうあるべきではないかと感じているのでとても関心高く拝見しておりました。

稲垣議長 福島委員ありがとうございました。続いて中島委員いかがでしょうか。

中島委員 皆さんの意見を大変感心して聞いておりました。私の感想では、まず若宮さんがおっしゃっていた海外と20年ほど遅れているという話で、2000年ごろから日本のデジタル化はほとんど進んでいない状況だと思います。当時は先進国の中でも10の指に入る、もしかすると一番か二番か勘違いしていた時期もありましたが、残念ながらこの20年間全く進んでいません。進まない理由はたくさんあるとは思いますが、今オープンガバナンスをのんびりやっても、これまでの繰り返りで、小田原評定でなかなか進まないのではないかという気も一方でしています。

トランスフォーメーションというのは、多くの方はご存知だと思いますが、仮面ライダーの変身と同じことです。仮面ライダーの番組がアメリカで放映されたときに、仮面ライダーはトランスフォーマと言われており、人間が仮面ライダーになるときに変身と言いますが、これがトランスフォーメーションです。要するに今ある状態から急激に別の状態へ変わっていくことがトランスフォーメーションであります。ガソリン自動車が電気自動車になるとか火力発電所が再生エネルギーの発電に変わるこういったことがトランスフォーメーションだと思いますが、その変身を支えるもの、ドライブするものがデジタルなんだということだと思います。

このデジタル技術の急速な発達に伴って、今まで使っていたデジタル技術から、新しい強力なデジタル技術に変えると、例えば、行政と市民の関係のプロセス、あるいは行政内部の業務プロセスといったものが、ものすごく良くなるのが期待できます。行政のDXでは、先ほどの話にもあったように海外の取り組み事例やデジタル甲子園での取り組み事例を取り込んでいけばよく、デジタルは所詮道具なので、この道具をうまく使っているところの物まねをすればよいのではないかと思います。これはあまり議論する必要もなく、行政がリーダーシップをもってやっていけば良いことだと思います。

最も重要なのは、住民自身が何が幸せなのか、本当のウェルビーイングが何かということが分かっていないことにあると思います。周囲がお金儲けしているから、お金儲けすることが幸せなのかと思ったり、スポーツやっているからスポーツすることが充実することなのかと思ったり、本当の自分のウェルビーイングが何かということを知っていない。したがって、住民に聞けば良いというわけではないと思います。そういったことから、やはり大きな枠組みとなるのはSDGsだと考えています。SDGsでは、貧困について誰ひとり取り残さずに貧しさから脱出しようとか、水の問題について、誰一人取り残さずきちんとした飲料水が飲めるようにしようとか、17の目標169の細かな目標がありますが、もちろんそれに収まり切れない別の問題もたくさんあります。とりあえず、目に見える枠組みとしてはSDGsがあると感じています。

エシカル消費いわゆる倫理的な消費には、例えばカーボンを多く出さないとかフードマイレージのような取り組みがあります。そのような取り組みは行政に頼らず、マスメディアやネット等からいろんな情報を得て、内発的に市民の方々に形成して取り組んでいるケースもありますが、インフルエンサーのようなリーダーシップを持ってビジョンを語る人がいたほうが、行政の考え方が啓発されより伝わっていくと思います。那覇市が持っているリソースを使って、そういった方を軸にした情報発信・広報活動を行う体制があると良いと思います。市民の方々のニーズを汲み上げるといっても、市民の方々もニーズを分かっていない可能性もあるので、そのニーズを啓発するための仕組みを那覇市が作って、那覇市が持っているリソースと組み合わせながら、市民の行動変革を促すことが必要だと考えます。

それから行政のDXについては、先ほども述べましたように、海外の事例や県外・全国の先進事例を学びながら着々とやっていけばいいのではないかなと皆さんの議論を聞きながら感じている次第です。

稲垣議長 中島委員ありがとうございました。これまでに5人の委員の考えを伺いましたが、大変内容が濃く、事務局としてうまくまとめ上げれば、今日一日で9割方出来上がるくらい充実していたのではないかと感じていますが、再度確認のため論点1のスライドをご覧ください。ここには行政の内部事務の効率化、行政サービスの向上、その周りにまちのDXが配置されています。この図を見ていただくと、私が冒頭申し上げました産業のDXは一番外側に位置付けられています。みなさんのお話を私なりに咀嚼しますと、まず、行政の中で、これは効率が悪い、遅れているな、なんとかしたいという問題を発見して解決する、言わばマイナスを減らす部分が「内部事務の効率化」に該当します。その周りにある「行政サービスの向上」が、マイナスを減らすだけでなくプラスを増やしましょう、夢を持ちましょうという部分に該当すると思います。そして、その先の「まちのDX」に働きかけていくんですが、これも皆さんの話を伺うと、課題を解決するという「まちのDX」の中でもマイナスを減らすための部分と夢を持つプラスを分ける部分の二つに増やすことができるのではないかと感じています。

次に二つ目の論点に、職員の視点と市民・事業者の視点と二つに分けて考えてみましょうというのですが、職員の視点では、やりがいを増やしていこうという柱ができております。これはマイナスを減らしていくこととプラスを増やしていくことで、職員のやりがいは増すと考えています。それが市民・事業者が安心して生活や事業を進めることを大きく後押しすることになるんだろうと思います。そして、直接、市民や事業者が安心して生活・事業を営むためのDX、あるいはITの活用というものもマイナスを減らす部分、プラスを増やす部分で整理して、片方に偏らず、両方しっかりバランスをとっていくことで、那覇市が20年の遅れを一挙に解決はできなくても、一年で三年分くらいは縮められるのではないかというふうに思いました。

論点1で皆さんの考えは大体伺いましたが、今は論点2への移行ということでつながりを私がつけさせていただきます。ここからは残りの時間を使って、この論点2について意見を伺いたいと思います。では、先ほど逆の順番で中島委員からお願いします。

中島委員 中島です。先ほど論点1の中で申し上げましたが、行政のDXから市民のDXへ行く形はありかと思いますが、行政のDXは海外や県外の事例を参考に、稲垣議長が言うように3倍くらいのスピードでやらないと追いつかない。マイナスをゼロにすることはこの6、7年では難しいと思いますので、とりあえずこれは体系的ではなくても、まず行政のほうからやりがいを増やしていくために、海外や県外の事例をまねで良いからぜひ進めてほしい。市民の方は、市民活動は行われているものの、必ずしも効率的に行われているかどうかわからないので、ビジョンを持った方々、リーダーシップを持った方々に参加をしていただくような仕組みを作っていくというやり方が良いのではないかなと思っています。そういった意味で言うと論点2については私の意見は少し違うかなと思っています。

稲垣議長 中島委員ありがとうございました。職員からの視点がなぜ必要かという議論があるかもしれませんが、今回の計画が官民データ活用推進基本法に規定されている市町村官民データ活用推進計画としても位置付けられるということもあり、那覇市役所内にどういったデータがあって、どのような活用の可能性があるのか、なかなか市民には分りづらいところもあるので、そういった意味では、今回は職員の視点というものものある程度盛り込む必要があろうかなという感じはしております。続いて、福島委員をお願いします。

福島委員 論点2は、意見は申し上げにくいという印象です。ざっくりとした話では、内容的には私は連動してやりましょうという考え方は賛成ですが、市民・事業者視点の目的の方はふわっとして大きな話となっているので、これは間違いではないのだと思いますが、定義をしっかりとしたほうが良いと思います。

稲賀議長 はい、福島委員ありがとうございました。論点2について、若宮委員、何かお考えありますか。

若宮委員 市民の方へ聞く際は、市民の方へ聞いたけどよく分からなかったとならないように、市民が分かるような聞き方をしないといけないと思います。例えば、江戸時代の方に「電話は黒電話とケータイ、どっちが良い？」って言われたって、両方見たことがないので何も回答することができないわけで、わかりやすい説明をした上で、あなた欲しいと思いますかというような質問をすることが大事だと思います。行政がお見繕いでやってしまうことがないように、広報活動をしっかり展開していただきたいと思います。

稲垣議長 若宮委員ありがとうございました。それでは、島田委員をお願いします。

島田委員 こちらの論点2を見ていた時に、最初に感じていたのが、職員視点の目的が含まれていることがより重要だと感じています。特に、マインドセットやスペース（余裕）を作っていくことがその中に含まれていることが良いと思います。市民や事業者の視点のところは、先ほどのご意見あったように、少しぼやっとしているけれども、もう少し市民や事業者の皆さんと直接話していくと描けると思いますので、両方をきちんと抱き合わせでやっていくということには賛同しています。

ちょっとした事例を簡単にお伝えしますと、先ほど言ってくくださったように住民の方は何がウェルビーイングなのか、何が幸せなのか分かっていない。ウェルビーイングという言葉聞いた時点で、カタカナや英語でなんだか分からないとなってしまいます。市民へ説明をする際は、日本語で説明できるようにするとか、何か那覇市の暮らしにまつわることで実体験しても

らうようなことが必要だと思います。例えば、福井県の高浜町では、何回も住民とのセッションを行っています。私は高浜モデルと呼んでいるのですが、それが一番住民に浸透していると感じており、他地域にとっても参考になると思います。意見を聞くというより一緒に話していく場を増やしていくということが大事なのだと思います。もう一つは、私がやっている沖縄ウェルビーイング推進協議会では3月に一度カンファレンスを実施し、7月にも実施する予定でしたが、コロナと安倍晋三さんの事件があったため中止しましたが、11月18・19日に開催を予定しております。ウェルビーイングって何かとか、どんなことを国や県や市がどういう風に考えているか住民の方が知る良い機会となるのではないかと考えていますので、そういった場をぜひ活用していただきたいと思います。

稲垣議長 どうもありがとうございました。最後になりましたが、島袋副議長によりご意見をいただきたいと思います。

島袋副議長 論点2のところでは、職員の方を孤立させてはいけないと思います。デジタルはツールという話がありましたが、職員の方がそのツールを活用して、自信をもってライブイベントで窓口に来る住民に対応できれば良いと感じています。現在の職員が置かれている環境は、専門性を問われたり、間違った対応をしてしまうと責任問題となって、職員個人の責となってしまうがちな風潮もありますので、DXツールを活用することで、自信を持って対応でき、それがひいては市民の安心感につながっていければ良いと思います。

稲垣議長 はい、ありがとうございました。これから何回も会議がございますので、今日の話を整理したうえで、膨らまし、また整理してまいりたいと思います。いずれにしても、今日のお話で、今ある計画の素案、フレーム、そして皆様のご意見を拝見しますと、新たな手法がたくさん取り入れられていることと市民中心の考え方が徹底されている点で、大変、那覇市らしい計画になっていると私は感じているところです。しかし、DXというぐらいですから、中島委員がおっしゃるように、連続的に今やっていることを半歩一歩進めるのではなくて、場合によっては非連続な展開というものもしっかり図っていなければならない。そのためには市民を巻き込むための施策、仕掛けづくり、福島委員もおっしゃっていましたイベント化、こういったところまで含めて、次回以降、さらに議論を深めていきたいと思います。ちょうど時間となりましたので、今日の議論はここまでとさせていただきます。事務局からの諸連絡の後、閉会とさせていただきます。

事務局 本日は貴重なご意見をいただきまして、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。事務局としましても、今回いただいた広範に及ぶ意見を具体化、抽象化しながら、また、目的に振り返りながら議論を深めていきたいと考えておりますので引き続きよろしくお願い申し上げます。

げます。次回の日程は9月下旬頃に予定しています。テーマとしましては「重点取組事項として盛り込むべきもの」等を予定しておりますが、今回の議論において新たにいただいた意見も踏まえながら、テーマを決定したいと思います。

稲垣議長 事務局の皆様ご苦勞様でした。では、皆さん次回を楽しみにしておりますのでよろしく願いいたします。今日はありがとうございました。